【青森県立青森高等学校　進路通信】

# 白聖はくあ　第９号　令和７年８月４日発行

## 《第１回学力向上セミナー》

７月 12 日（土）・13 日（日）の二日間、青森高校を会場に「第１回学力向上セミナー」が開催されました。このセミナーは、平成 23 年度から青森県が取り組んでいる「医師を志す高校生支援事業」の一環として年に３回開催されています。青森県の医師不足を解消するために、高校生の医師への志を育てるとともに、医学部医学科進学に求められる高水準の思考力・判断力・表現力を養成することを目的としています。第１回目となる今回は、青森高校からは医学科を目指す３年生 14 名、２年生 30 名の他に、難関大を目指す２年生 28 名が参加しました。

３年生医学科クラスでは、約３ヶ月後に控える医学部医学科の総合型選抜や学校推薦型選抜の受験対策として、「医系論文及び演習」講座で、志望理由書とアドミッションポリシーの関連性や、近年の医系小論文の傾向と対策、面接やケーススタディ等に必要な能力・技術・注意点を講義や演習を通じて学びました。講師を務める奥津茂樹先生（駿台予備学校）による丁寧な解説によって、自分が身につけなければならない資質は何か、伸ばすべき能力は何かを見直す機会となりました。

２年生医学科クラスは、英語・数学の他に「医系論文」の講座で、医学科受験志望者向けの資料読解力・思考力・判断力・表現力を養う問題に取り組みました。

２年生難関大クラスは、国語（現代文）、数学、英語のハイレベルな問題に取り組み、難関大学に合格するために必要な学力水準を知る貴重な体験となりました。

このセミナーには青森高校から毎年多数の生徒が参加しており、セミナーを通じて多くを学んだ先輩方が、医学科合格を勝ち取っています。ちなみに第 2 回セミナーは 11 月末に 3 年生のみを対象として青森高校を会場に、第 3 回セミナーは 2 月中旬に 1・2 年生を対象に青森東高校を会場に開催する予定です。

## 《第１回最難関大学志望者合同学習会》

７月 19 日（土）・20 日（日）の二日間、青森高校を会場に「第１回最難関大学志望者合同学習会」が開催されました。この学習会では、高い志を持つ生徒同士が切磋琢磨しながら学びを深め、個々の思考力を伸ばすとともに、進路志望の達成に向けて高い目標と具体的な目的意識を持ち、主体的に学んでいく意欲を高めることを目的としています。最難関大学を志す２年生を対象に、年に３回開催されていますが、今回は青森高校・弘前高校・八戸高校を中心とした最難関大学を志望する県内の生徒 61 名が集まり、青森高校から 26 名が参加しました。

第１回目となる今回の学習会では、三つの重点目標が掲げられました。まず一つ目は「最難関大学入試レベルの問題に取り組み、解説講義を聞くことで、求められる知識・技能、思考力・判断力・表現力の水準を知る」こと。二つ目は「他校生と共に学ぶことで、全国のライバル（仲間）の存在を自覚すると共に、学びの深め方・広げ方を知る」こと。そして三つ目は、「ここで得た学びの方法を指針とし、受験までの自己の学びに生かす主体的な態度を身につける」ことです。

やはり最難関大学の合格を勝ち取るためには、ただ漫然と勉強するのではなく、目的意識をしっかりと持ち、自分の学びが正しく行われているかを振り返り、常に改善していく力が求められます。また、よく青森高校の生徒に見られがちな損得や有利不利、要不要・用無用という低次元な思考での学習を捨てること、さらには、この学習会で吸収したことを日々の学習につなげて、いかに自己研鑽に努めることができるかが重要だと思います。

第２回学習会は 12 月中旬に、第３回学習会は３月中旬に２年生を対象に開催予定です。

## 《大学入試について学ぼう③》

受験における「競争率」を表す「倍率」、数字が大きいと驚きますよね。とりわけ自分の志望校・志望学部が高倍率だと「出願しても合格できないのでは･･･？」「志望校を変えたほうが良いのでは･･･？」と不安な気持ちになる人もいると思います。今号では、そんな大学入試の「倍率」について詳しく説明します。ぜひ正しい認識を持って、志望校選定・受験対策の材料として上手く活用してください。

まず、受験に関する入試結果の資料では、おもに 2 種類の「倍率」が登場します。「志願倍率」と「実質倍率」です（この他に「受験倍率」等の用語もありますが、頻出というほどではないので今回は割愛します）。

「志願倍率」と「実質倍率」は、

**●志願倍率＝志願者数÷募集人員**

**●実質倍率＝受験者数÷合格者数**

という式で求めます。噛み砕いて解説すると、

**●大学に対して「行きたい」と手を挙げた受験生の人数が、募集枠の何倍だったかを表すのが「志願倍率」**

**●実際に受験した人数が、合格した人数の何倍だったかを表すのが「実質倍率」**

ということです。冒頭で「倍率」は「競争率」だと書きましたが、「志願倍率」については「人気度」と例えたほうが分かりやすいかもしれません。

さて、この 2 種類の「倍率」は、実は同じ募集単位があっても数値が大きく離れることがあります。どのような違いが存在するのかそれぞれのデータをどのように見れば良いのか、詳しく見ていきましょう。

### ① 志願者数 VS. 受験者数

出願しても、他大学への進学を決めたから、などの理由で実際には受験していない人が一定数いるため、2 種類の「倍率」の「割られる数」どうしを比べると、一般的に「志願者数」のほうが「受験者数」よりも多くなります。顕著な例として、国公立大学の一般選抜後期日程は入試の実施時期が遅いため「欠席率」が高くなっており、「志願者数」と「受験者数」に大きな差が生まれます。

### ② 募集人数 VS. 合格者数

他大学との併願が可能な入試では合格者全員が入学手続きをするわけではないため、大学側はどのくらい手続きしてもらえるか（いわゆる「歩留まり率」）を予想して合格発表を行います。したがって、2 種類の「倍率」の「割る数」どうしを比べると、一般的に「合格者数」は「募集人員」よりも多くなります。特に私立大学で顕著です。

これらのことから、「割られる数」が大きく「割る数」の小さい「志願倍率」は、計算すると一般的に大きな数値になります。「上振れ」とも言います。先ほどの国公立大学の一般後期の例でも、2024 年度入試の入試結果は志願倍率 10.01 倍に対し実質倍率 2.87 倍と大きく差が開いており、「志願倍率」が高く出ていても必ずしも競争率の高い難しい入試とは言い切れない、ということが分かると思います。

**【例】2024 年度入試 国公立大学一般選抜後期日程の結果**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 志願者数 159,846 | ÷ | 募集人数 15,975 | ＝ | 志願倍率 10.01 |
| 受験者数 58,933 | ÷ | 合格者数 20,536 | ＝ | 実質倍率 2.87 |

（代々木ゼミナール集計）

自分の志望校・志望学部の入試について、両方の「倍率」が判明している場合は、実際の受験者の中での「競争率」をより正確に表すことのできる「実質倍率」のほうを参照して合格可能性を測ってみると良いでしょう。ただし、必ずしも「志願倍率」が劣っているのかというと、そういうわけではありません。「実質倍率」は入試が合格発表まで一通り完了しないと判明しませんが、「志願倍率」は出願〆切を迎えた時点で計算できます。早くデータを入手できる、という点が「志願倍率」の優れている点です。実際、塾や予備校では、各大学の公表する「志願者数速報」を参照して「志願倍率」を算出し、その年の各大学・各分野の出願動向や難易度などを占っています。上述のとおり「上振れ」する場合があることに注意する必要はありますが、大学によっては出願期間中毎日のように暫定版の「志願者数速報」を公表する場合もありますので、受験生の皆さんも、出願しようか直前期まで迷っている場合には判断材料の一つとして暫定版のデータを見て決める、という手段も覚えておくと良いでしょう。

なお、医学部や難関大学などが中心になりますが、2 段階選抜を行う大学の倍率については注意が必要です。1 次試験の受験者数（国公立や一部の私立は志願者数と同数）を使って計算した「実質倍率」は、当然、2 次試験の受験者数を使った「実質倍率」よりも高倍率になります。風数の大学を比較する際には、どの段階の人数データをもとに算出した倍率なのか、条件が揃っているか確認したうえで見るようにしてください。

【代々木ゼミナール　入試用語コラムより引用・抜粋】

大学の案内冊子やホームページには、過去の受験実施状況が掲載されています。気になる志望校の「志願倍率」と「実質倍率」がどのように推移しているか自分で調べて確認してみてはいかがでしょうか。